

道内各地で進展する地方創生プロジェクトの最前線をクローズアップ！

北海道創生ジャーナル

創る

Vol. 18

2021.12

その先の、道へ。北海道
Hokkaido.Expanding Horizons.

CONTENTS

特集

01 廃校を活用した地域活性化の取組

- オフグリッドの植物工場（深川市／旧多度志中学校）
- 農業担い手育成センター（厚真町／旧富野小学校）
- ファイナリーとサテライトオフィスの複合施設（上ノ国町／旧湯ノ岱小学校）

地域が動く・プロジェクト最前線

- 07 松前町 ～地域活性化に向けた肉牛改良センターの取組～
- 08 美瑛町 ～電子地域通貨（Beコイン）による地域内消費の拡大～

「地域とつながるミーティング」から ～地域創生のヒントを探る～

鈴木知事が地域づくりで活躍されている方々とオンライン意見交換

- 09 日高管内 地域づくり関係者編

廃校を活用した 地域活性化の 取組

少子高齢化の進行に伴い、地域内には使われなくなった小中学校の校舎や公共施設など公用遊休資産が点在しています。

近年、そうした施設を地元特産品の加工会社の工場や福祉施設、体験施設として活用するなど、地域資源を活かし、地域経済の活性化につながるような魅力的な取組が増えてきています。

今回はなかでも「廃校施設」にフォーカスし、道内での地域活性化に向けた取組を紹介します。



再生可能エネルギーを活用した事業を形に

深川市：オフグリッドの植物工場



深川市

廃校の有効活用

多度志中学校は平成26年3月に閉校となり、市では地域活性化に向けて中学校の敷地と建物を合わせた有効活用を模索していました。

そうした中、平成30年12月に市内の金融機関の仲介により、学校施設の活用に興味を示していた株式会社北海道パレットリサイクルシステムと出会いました。

深川市は、北海道のほぼ中央に位置し、全国2位の生産量を誇るソバや作付面積全道3位のお米など、おいしい農作物であふれた人口約2万人の市です。

市では、平成26年に廃校となった旧多度志中学校を無償で株式会社北海道パレットリサイクルシステムに貸与し、太陽光発電などのクリーンエネルギーを利用したオフグリッド電力会社の送電網を使わず電力を自給自足する仕組の植物工場として活用しています。この取組について、市の担当者と株式会社北海道パレットリサイクルシステム代表取締役の佐藤さんにお話を伺いました。

（取材者：小林、原田）



▲廃校となった旧多度志中学校

同社からクリーンエネルギーを利用した植物工場の設立や事業構想についての説明を受け、取組内容は新たな雇用の場の創出が期待されるなど、地域振興につながるものであったことから、協議を行い、令和元年11月から令和7年2月までの63か月間、旧中学校を無償貸与することが決まりました。

事業開始早々に新型コロナウイルス感染症の影響により、(株)北海道パレットリサイクルシステムも事業計画の見直しが必要となるなど、苦慮していましたが、令和3年10月29日に本施設で栽培された水耕レタスの販売が、道の駅「ライスランドふかがわ」に隣接する「オハナマーケット」で始まりました。

市の担当者である学務課の今川係長は廃校の利活用について「市内の廃校は、旧多度志中学校を最後にすべて有効活用されています。廃校の活用は今回のようにタイミングが重要で、地元企業との日頃からのつながりから生まれた、まさに

「ご縁」だと思っています」と話しており、今後も様々な形で、の官民連携による地域活性化が期待されます。



▲今回お話を伺った深川市学務課の今川係長(右)と加藤さん(左)

(株)北海道パレットリサイクルシステムと地域振興



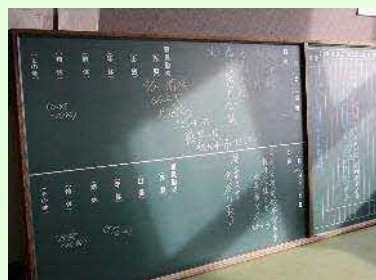
(株)北海道パレットリサイクルシステム 代表取締役 佐藤 弘幸 さん

株北海道パレットリサイクルシステムは平成23年に連携体として創業し、平成26年に法人への移行を経て、電気自動車用の発電ファンヒーターや太陽光発電技術の開発などに取り組んできました。

この施設との出会いは、市内金融機関の営業マンに「廃校を活用して事業を展開したい」と話していたところ、廃校となった旧多度志中学校の活用についてご提案いただきました。

その後、時間を掛けて深川市には当社の取組や熱意をお伝えし、旧多度志中学校の利活用が決定しました。

旧多度志中学校では、太陽光自家発電など再生可能エネルギーを活用し



▲閉校時に黒板に書かれたメッセージは大事な思い出として保存



▲アクアポニックスの仕組み(イメージ)

今では、この事業に興味を持っていた事業者やメディアからの取材や視察も増えましたが、私たちの取組はまだ始まったばかりです。

国内では多くの学校が廃校になるとよく聞きます。学校の敷地内すべてを活用する取組は珍しいそうなので、この取組を軌道に乗せ、廃校を活用したモデルケースにしたいです。

まずは深川市の地域振興を優先し、市内の飲食店やスーパーなどを中心にレタスを出荷し、事業を拡大させたいですね。

当社としては、多度志地域のシンボリックな存在である校舎を地域のコミュニケーション拠点としても活かしたいと思い、住民説明会や施設見学を実施するなど、地域の方とのコミュニケーションを積極的に行ってきた結果、少しずつ協力の輪が大きくなっていきました。

別の視点で、この施設は既存電力網に頼らないオフグリッドの施設です。で、電力の用途を取捨選択すれば2、3日ほど電力を賄うことができます。

ここを災害があつた際の避難先として有効活用していただくことも考えています。

当時を思い返すと、事業開始時は新型コロナウイルス感染症が猛威を振るっており、当初予定していた事業計画を大幅に見直すなど、苦労は絶えませんでした。その見直しの一環で、校内のリフォームや水耕栽培するユニットなどを自作することにより、独自の生産体制を構築するなど工夫を凝らしていたところ、この取組が東京都の大手ゼネコンの目に留まり、業務提携を締結するなど、一歩ずつ前進していきました。



▲みずみずしく育ったリーフレタス

本気で農家になりたい人を全力サポート！

厚真町：農業担い手育成センター



▲廃校となった「旧富野小学校」を担い手育成センターとして活用

厚真町では、明治の開拓期から豊かな水資源を利用した水稲栽培が行われてきました。基幹産業が農業であることから、他にも小麦、大豆、馬鈴薯、てん菜といった北海道型の畑作、花きなどの施設園芸、畜産も営まれています。とりわけ露地栽培される特産の「ハスカップ」は作付面積日本一を誇ります。

このように町内では多様な農業が行われているからこそ、個々に適した農業を実現しやすくなっており、なかでも町では高齢化や後継者不足対策として、新規就農をサポートする体制を強化しています。

厚真町の農業

厚真町は、胆振管内の東部に位置し、主に1次産業が盛んで稲作は管内随一の作付面積、ハスカップは作付面積が日本一の町です。町では平成23年に閉校となった旧富野小学校を改修し、「農業担い手育成センター」として活用しています。取組について、町とセンターの職員、研修生の方にお話を伺いました。

（取材者：原田、小林）

設立のきっかけ

厚真町では、以前から農業を生業とする方の高齢化や後継者不足の対策が課題となっていました。平成23年から、就農希望者を地域おこし協力隊制度を活用した農業支援員として新たに迎え、町内の農家を中心となって活動している新農業者育成協議会で新規就農に向けた研修を行っていました。しかし、就農希望者のほとんどが農業未経験の方で、このままでは受入農家の負担が増えてしまうことから、「農業の基礎から学べる場が必要ではないか」との声が挙がり、平成30年4月に地方創生拠点整備交付金を活用し農業担い手育成センターが開設されました。

開設にあたっては、廃校を活用したいという思いや、グラウンドの水掃けが良く、畑作を行うことに適していたということもあり、現在の「旧富野小学校」が選ばれました。

グラウンドだった場所は、農業研修生の農場として、施設野菜や露地野菜を栽培しており、土づくりやハウスの組立てなど農業の基礎から学ぶ場所として活用されています。



▲研修の様子

農業研修施設を設ける構想は以前からあったと話す大垣主幹



研修生は毎年3名募集し、これまで6名の卒業生を送り出しています。研修期間の3年間で、農業の基礎知識や生産計画などを学び、卒業後の独立就農を目指しています。

取組について、町の担当者である産業経済課の大垣主幹からは「新型コロナウイルス感染症の流行に伴い、都会から田舎へ移住し、農業を自分の生業としてという方も来ています。厚真町は、子育て支援や住環境の整備、起業家への支援に力を入れており、移住者が多いまちです。今後は担い手育成センターが整備されたことにより、今後も町に新規就農者が増え、農業面から少しでも、町に活気が溢れるようになることが期待されます」と将来への展望をお話しいただきました。



▲研修生が自ら品目を選ぶ「研修農場」

大きな魅力「研修農場」

「新規就農を目指す人が厚真町の担い手育成センターでの研修を選ぶのには、家族構成や自己資金などの基準を定めない柔軟な受入体制のほか、他所ではやっていない研修生の育てたい品目を育てられることが大きな魅力となっています」と話すのは、施設の農業研修指導員である高橋さん。

研修生の育てたい品目を育てることができる「研修農場」では、将来を見据えて少ない面積でも高収益を生める品目を育てられるようにし、その上で研修生が育てたい品目の栽培を行います。

ただ、実際に研修を始めると、研修生の育てたい品目で必ず高収益を生めるということではないので、3年間の研修課程の中で独立後の品目を絞っていくことが求められます。



▲イチゴの魅力を語るセインさん

◆セイン・ソヘンさん（研修1年目）
日本の米や野菜をとっても魅力的に感じ、特に日本のイチゴが好きで将来は厚真町でイチゴ農家になることを目指しています。

研修生の声



▲研修生へ指導する高橋さん

担い手育成センターでは高収益作物として、ほうれん草、イチゴを勧めており、研修生の中でも卒業後はこの品目で就農を目指している方が多いそうです。

研修の課程では農家での実習も体験することができ、実際に作物の収穫作業や選別、防除のやり方を学ぶ貴重な機会となっています。

農業を学ぶ3年間はあつという間で、



▲作業中の山中さん

◆山中さん（研修2年目）
以前は香港に住んでいましたが、厚真町は子育てをする環境がとても良く、魅力的で移住を決めました。将来は、ほうれん草をメインに厚真町での就農を目指しています。

◆小林さん（研修3年目）
来年4月の就農に向けてイチゴの生産準備を今年から始め、1年を通じて収穫できる体制を将来的に目指しています。妻と2人で始めましたが、父親も厚真町へ移住し、農業を手伝ってくれるので大変心強いです。独立に向けて、技術・知識不足な面があり大変ですが、町内の先輩方からもアドバイスをいただきながら作付を行っています。

農機具の扱い方、肥料の置き方など基礎的なことを学ぶ時間しか確保できません。実際に就農してから様々な問題が出てきますが、その時は指導員の方が生育状況の確認や営農計画に沿った作付ができていくかなどのサポートを行っています。

新たな産業×関係人口の創出・拡大

上ノ国町：ワイナリーとサテライトオフィスの複合施設



設立のきっかけ

檜山管内南部に位置し、1次産業が盛んで海産物、農産物が豊富な上ノ国町。古くからの歴史を持ち、貴重な歴史遺産や温泉・スキー・アユ釣りなど魅力ある観光資源が数多くあります。

今回は、廃校を利用したサテライトオフィス機能を併せ持つ上ノ国ワイナリーについてお話を伺いました。

（取材者：結城、横山）

上ノ国町では、基幹産業である1次産業従事者の高齢化に加えて、若い世代の転出が進んでおり、町の将来を担う人材不足が課題となっていました。

このままでは、地域の経済成長が困難と考え、既存の産業への支援はもとより、新たな産業による雇用の創出と地域活性化を検討していました。

上ノ国町の産業を活かすことができる施策を模索する中で、近年、檜山や渡島管内のほか、全道においても展開しているワイン造りに着目。地質調査を行ったところ、上ノ国町はワイン用ブドウの栽培に適していたことや、今後の観光資源としての可能性があることから、上ノ国ワイナリーの構想がスタートしました。

施設には、平成27年に閉校した旧湯ノ岱たいたい小学校を活用しています。廃校の活用は町にとってかねてからの課題でしたが、自然に囲まれた立地で重厚な木材が使用されており、ワイン造りのイメージにも合うことから利用を決めました。体育館をワイナリーとする一方、近年のコロナ禍によるテレワークやワーケーション需要の高まりを受け、

教室などがある校舎にはサテライトオフィスを併せて整備する運びとなりました。

こうして、ワイナリーとサテライトオフィスを併設した、全国でも珍しい複合施設が上ノ国町に誕生しました。施設は町が地方創生拠点整備交付金を活用して整備し、運営は地域産品のブランドディングなど、地域商社事業を展開する上ノ国開発株が行います。



◀▲校舎を活用したサテライトオフィスエリアの完成イメージ



全国へ届け こだわりのワイン

今年10月から稼働を始めたワイナリーでは、赤、白、ロゼスパークリングの3種類のワインを醸造しています。取材時には、発酵を終えたワインが大型のタンクや木製の樽で熟成されていました。「赤、白のワインは本格的な味わいの辛口にする予定です」と語るのは、上ノ国ワイナリー農場・醸造担当の笠森さん。

本州出身の笠森さんは、いくつかのワイナリーで働く中で、道産ワインが好きで北海道での生活にも興味があったことから、平成30年に北海道へ移住し、今年から上ノ国ワイナリーでワイン醸造に従事されています。

本格的なのは赤、白だけではなく、ロゼスパークリングも手間とコストがかかる伝統的な手法で作られています。最近では炭酸ガスを注入する簡易的な手法もある中、高級シャンパンにも用いられる瓶内二次発酵方式でこだわりのワインが作られています。

今後、さらなる熟成や瓶詰めなどの工程を経て、赤、白ワインが来年春頃、ロゼスパークリングが夏頃の出荷を予定しており、750ml瓶で約1万8千本分の製造を見込んでいます。



▲ブドウの搬入と熟成中のワイン



▲ワインの醸造工程について説明する笠森さん

醸造所としては中規模の設備を持つ上ノ国ワイナリー。笠森さんは「将来的には檜山や渡島管内などのワイン造りを志すが、ここに集まってくることを想定した規模となっています」と語ります。取材時の11月現在で、ワイナリーでの新規雇用が3名、ワイン用ブドウ農家の新規就農が令和5年までに8名を見込むなど、すでに雇用創出の効果が現れています。

サテライトオフィスの整備

今年12月に完成予定のサテライトオフィスは、木造校舎ならではの温かみを残しながらも、開放感のある空間です。

宿泊できるバス・トイレ付きの個室が8室、会議室2室、調理室やフリースペースのほか、ワインの販売スペースも設けています。フリースペースは、町民向けのワイン講座やインターネットでの情報発信拠点としての活用を考えており、ここを起点に上ノ国産ワインのブランドが広がっていくことが期待されます。

首都圏のIT企業等によるワーケーション利用を見込んでいるサテライトオフィス。町は、近隣に北海道新幹線の本古内駅が誕生したこともあり、これをきっかけに関係人口・交流人口を創出し、移住定住の促進へつなげることを目指しています。



▲現在工事中のサテライトオフィス

今後の課題と展望

施設を運営する上ノ国開発株式会社・広報担当の中野さんは今後について「ワイナリーとサテライトオフィスの2つのテーマで事業を展開するため、全体でのプロモーションや運営体制の強化が課題」とした上で「ワイナリーを上ノ国町だけの取組とするのではなく、近隣町とワイン用ブドウの栽培で連携し、檜山地域を道南のワイン産地の一角としたい」、サテライトオフィスについては「ワーケーションでの利用のほか、観光誘客の拠点としても活用できればと考えています」ともお話しいただきました。

廃校の有効活用、新たな産業と特産品による地域活性化、関係人口の創出・拡大。こうした構想から誕生した上ノ国ワイナリー。新たな試みが、上ノ国町、ひいては檜山地域全体の地方創生に発展していくことが期待されます。



▲取材に同行いただいた水産商工課の品田課長（右）と久末主幹（左）

松 前 町

地域活性化に向けた 肉牛改良センターの取組

松前町は北海道の最南端に位置し、福山（松前）城・寺町などの歴史と文化があるまちで、道内で最も年間平均気温の高い温暖な気候に恵まれています。
今回は令和元年に生産基盤の強化や新規就農者の確保を目的に建設した肉牛改良センターの取組について紹介します。



取組のきっかけ

松前町は主産業である水産業の不漁・漁獲枠制限等の影響により、水産業からの撤退等で、若者の働く場所の確保が課題となっていました。

一方、畜産業は主に肉牛繁殖経営で肥育牛や繁殖牛となる「素牛」を出荷し、市場が高値で推移していることもあり、安定した収入を得られています。しかし、農家戸数は減少傾向にあり、畜産農家の高齢化や後継者不足による離農が大きな要因となっています。

そのため、町では新規就農を目的とした研修生受け入れによる働く場所の創出と畜産農家の生産基盤の強化を図るため、地方創生拠点整備交付金を活用し、黒毛和種の改良や人材育成機能を持った肉牛改良センターを建設しました。

就農支援について

肉牛改良センターでは最長3年間、新規就農を目指す研修生が肉用繁殖牛を飼養し、繁殖経営に必要な技術や知識を学ぶことができます。

また、現在新規就農者に向けた賃貸型牛舎・堆肥舎・住宅を地方創生拠点整備交付金を活用して建設中であり、

研修を終え、新たに農家を始める際の農地取得や牛舎建設等の初期投資の負担軽減や町外からでも受け入れができるための住む場所の確保など、就農できる環境を整備し、安心して畜産経営を行う体制をつくり支援しています。

さらに、肉牛繁殖経営で新規就農をした場合、収入を得るまでに2年にかかるころ、肉牛改良センターから子牛を購入し、市場へ出荷することで就農の初年度から収入を得ることができます。

現在、町外から来た2名と町内の元漁協職員1名が研修生として学んでいます。関係機関と連携し、町内だけでなく町外での研修や視察、必要免許の取得なども行い、就農に向けての準備が進んでおり、研修生のうち1名は来年度から新規就農を開始する予定になっています。



▲作業中の研修生

農家支援について

肉牛改良センターでは、優良な繁殖牛から採卵を行い、受精卵を生産・移植することで質の高い子牛を生産し、約3カ月齢で町内の農家に販売しています。

各農家では購入した子牛を、優良繁殖牛として保留したり、市場に出荷する牛の頭数を増やしたりすることで利益を生み出すことができます。

また、高齢化が進んでいることから、分娩作業等の労働負担を軽減するために、繁殖頭数を減少しても、センターから子牛を購入すれば、一定の収入を得ることができます。

今後の展望

今後も多くの研修生を募集し、新規就農者を支援する取組をさらに強化することで、農家戸数の増加や畜産業の生産基盤強化を図っていきます。

そして供給体制を確立させた後は肥育牛の生産・商品化を行い全国へ発信し、松前町の地域活性化につなげていきます。



▲授精前や妊娠鑑定済みの繁殖牛を各房ごとに群で管理



美 瑛 町

電子地域通貨 Beコイン による地域内消費の拡大

取組のきっかけ

美瑛町では、日常の買い物や町外で
する人が多く、購買力の流出が課題と
なっていました。そのため町内での消
費喚起と商店街の活性化を目的に平成
20年度から町民や観光客に向けてプレ
ミアム付き商品券発行事業を実施して
いました。しかし、商品券発行の労力
や換金コストがかかるうえ、効果が一
時的で事業終了後は反動減の傾向もみ
られたことから、これらの課題を解決
するため電子地域通貨「Beコイン」
の導入に踏み切りました。

Beコインについて

「Beコイン」はスマホアプリやカー
ドを利用したキャッシュレス決済サ
ービスで1ポイント＝1円として町内の
買い物などに利用することができます。
QRコード決済方式のため、店側では
Wi-Fi環境とSIMフリーのスマホ
があれば導入が可能です。町民には記
名式のカードが配付され、一人ひとり
のポイントや町で一括管理することが
可能となっています。町外の方も無記
名のBeコインカードを購入し、利用
することができます。町外向けに発行
したポイント付きのカードは完売とな
り、利用も増えています。



▲Beコインカード

Bieiの「B」と「e」から美瑛で暮ら
す皆様に愛され、英語の「Be」（な
る）から「商品に、サービスに、なん
にでもなるポイント」という意味が込
められています。

Beコインの特徴

Beコインは、1枚のカードに取扱
店や利用期限の異なる複数種類のポイ
ントを付与することができます。この
仕組により、商品券としてだけではな
く、町の様々な事業にカードの活用が
可能となっています。

主な例を紹介すると、町では移住・
定住政策にも力を入れており、助成対
象の住宅に住んだり、対象の施設で
テレワークをするポイントが貯まり
ます。その他にもボランティア活動な
どにも行政ポイントがあります。利用
者（町外の方）にはポイントが付与さ
れ、地域内で消費が生まれます。町と
しても望んでいる政策を推進でき、地
域内で良い循環が生まれています。利
用も簡単で、「なんにでもなるポイン
ト」なので、町民の皆さんは便利に使
うことができます。

美瑛町は北海道の中央に位置する丘の景色や「青い池」で有
名な農業と観光のまちです。
令和3年4月に地域内消費の拡大や地域のコミュニティづく
りのため電子地域通貨（Beコイン）の本格運用をスタートさ
せました。このプロジェクトについて紹介します。

担当者の声

商工観光交流課
課長補佐
赤間 昭己さん



当初は町民に受け入れられるか
不安でしたが、町民や事業者等
に向けて全18回の事業説明会を行っ
てきました。昨年12月に始めた実
証実験では、本年3月末までの利
用期間内に発行額の93.5%の利
用があり、Beコインについて好
意的な意見も多くなってきました。
今後、Beコインを活用した事業
を増やしていきたいです。

今後の展望

本格運用を始めた4月以降のBeコ
インの発行総額は電子商品券事業も含
めると2億円を超え、徐々に町民に浸
透してきています。今後、町外の利用
促進やさらに利便性を向上させるため
情報発信やコンビニでのチャージ、
カードからアプリへの移行を促進して
いきます。また、加盟店の拡大や、行政
ポイントの充実、チャージ利用を促進
することで「Beコイン」の流通量を
増やし、さらなる地域活性化を図って
いきたいと考えています。

『地域とつながるミーティング』 ～地域創生のヒントを探る～



から



日高管内

地域とつながるミーティング

鈴木知事が北海道創生に向けて活躍されている方々から、それぞれの取組や地域への思いなどをオンラインでお伺いします。同席した職員から皆様にその様子をお伝えします。

令和3年10月14日開催

日高管内 地域づくり関係者編

今回が初開催となる「地域とつながるミーティング」では、日高管内で地域の活性化に向けて活躍されている3名の方に、知事がお話を伺いました。

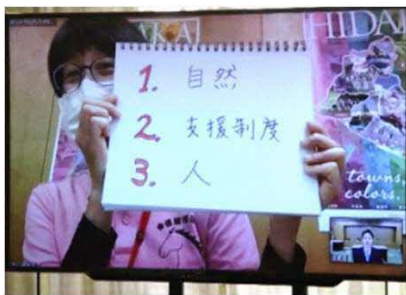
はじめに、新ひだか町で移住コンシェルジュとして活動している市川福子さんにお話をいただきました。市川さんは千葉県のご出身で、2005年に新ひだか町へ移住されました。その後、2013年から現在までの9年間、新ひだか町役場の職員として、移住の担当をされています。ご自身の移住当時を「仕事なし、身寄りなし、お金なし!」だったと振り返る市川さん。その時の苦労や失敗を重ねた経験から、移住の最後の決め手は「人」であるとの思いを持つ

ち、移住者同士や町の人との「つながり」を大切にする取組をお話いただきました。

知事からは「私も移住者なので共感できる」「移住には不安もある中で、市川さんのように実際に体験された方から率直なお話を聞けるのは、すごく強みになる」と発言がありました。

また、馬産地である日高管内ならではの取組として、歴代の名馬をモチーフとしたキャラクターが多数登場するシミュレーションゲーム「ウマ娘プリティーダービー」を活用した地域活性化のお話も伺いました。次に、浦河観光協会の中川貢さんからお話をいただきました。中川さんは神奈川県のご出身で、2013年に地域おこし協力隊として採用され、浦河町へ移住されました。

地域おこし協力隊になる以前に、国内外で観光ガイドを勤めた経験を活かした「短期集中乗馬レッスンプログラム」や「お魚さばき体験と海鮮丼ランチ」など、ツアーの定番でリピーター多数の体験型観光プログラムの取組を紹介いただきました。他にも、知る人ぞ知る



▲知事にクイズ《移住決断のポイントは何?》を出題する市川さん



▲うらかわオバケ桜(左)と人気の乗馬レッスン(右)



浦河町の魅力を語る中川さん▲

という存在だった巨大な一本桜、「うらかわオバケ桜」を昨年からはじめて一般公開したところ大反響を呼び、10日で一万人が訪れたとの話には驚きました。

市川 福子さん

(新ひだか町移住コンシェルジュ)

中川 貢さん

(浦河観光協会事業戦略部長)

幌村 佑規さん

(プログレス日高会長)



北村日高振興局長

鈴木知事

最後に皆さんと
記念撮影!



また、現在のコロナ禍、そしてこの先のコロナ後を見据えた取組として、管内7町、振興局、民間団体の3者で連携した「オンライン物産展サイト」の開設に向けた取組も伺いました。「例年開催している札幌市での物産展が開けない中、コロナ禍で大変な事業者さんにとっても新たな販売ルートが増えて、すごく喜んでいらつやいます」と話す中川さん。知事からも「オンラインサイトを持つことに踏み出せない事業者さんも、このような取組によって新たなお客さんを獲得できることが具体的にイメージできると、一歩を踏み出すきっかけになる」と発言がありました。

最後に、日高管内の建設若手経営者の会「プログレス日高」会長の幌村佑規さんからお話をいただきました。幌村さんは地元の新しいだけ町出身。本業である建設業の研鑽のみならず、地域の活性化に微力ながら寄与するという「プログレス日高」の目的のもと、様々な活動をされています。

同会の20周年記念として始まった「プログレスの森事業」。建設業においても地球温暖化などへの問題意識が欠かせないという当時の会長の想いから、2010年に日高振興局と森林協定を締結し



▲プログレスの森事業と観光PR事業

植樹を行い、現在までに650本ものトドマツを植樹しました。幌村さんは「ゼロカーボン北海道にも資する取組なので、今後も継続したい」と語ります。

また、道庁前で開催された日高地域の観光PR事業への協力や、日高山脈襟裳国定公園の国立公園化へ向けて機運醸成のために作成した冊子についてもお話をいただきました。

知事からは「長年続けられている植樹活動といった取組を通じて、地域の大切な世界的な問題を、より多くの方に知っていただくことにつながればありがたい」と発言がありました。

当日の 知事の言葉から

どうしてもコロナ禍で暗い話が多い中、皆さんが地域で汗を流して活躍されている姿は、知事としても大変心強いものです。今日いただいた様々なお話を踏まえ、道政に皆さんの声を反映していきたいと思えます。

また、こんなにも地域で活躍されている方々がいるのだということを多くの方に知っていただくため、私もSNSなどで広くPRしていきたいと思っていますので、これからもよろしくお願ひします。



地域とつながるミーティングの動画はこちらからご覧いただけます。

北海道とつながるカフェ

参加
無料

北海道とつながろう。

自分らしく働き、休日を楽しむ、北海道暮らしの魅力…

道内各地で活躍する移住の先輩や

北海道ゆかりの方々とリアルな話をしてみませんか？

参加登録
はこちらから

全7回
開催

『オンライン』と『対面』の両方でイベント開催！



GUEST

THEMA

8月	DJ ミツ (マオイ自由の丘 ワイナリースタッフ)	ゆか (先鋒料理研究家)	農業&ワイン × レシピ	北海道の旬のおいしさを引き出す、とっておきのレシピをお届けします。 生産地である旭川市と長沼町の移住の先輩からリアルな北海道の暮らしをご紹介します！
9月	知床の鮭漁師 (漁師)	すてんちじん 小伊勢健太 (寿司職人)	漁業 × 寿司	広大な漁場を有する北海道。知床の漁師と、すすきのの寿司職人をゲストに 迎え、北海道の漁業や海の幸の魅力についてご紹介！斜里町と小樽市の暮らし について先輩移住者がお伝えします。
10月	あんどうまみ (レポーター・ イラストレーター)	TATSUO (ロストカムイ 出演ダンサー)	アイヌ × アート	北海道の先住民族「アイヌ」。漫画『ゴールデンカムイ』でも描かれる、今話題 のアイヌの魅力を紹介します。先輩移住者からリアルな暮らしをお伝えします。
11月	エンス・マラカイ (通訳・タレント)	ロス・フィンドレー (アウトドア アクティビティガイド)	観光事業 × インバウンド	冬にはパウダースノーを求めて国内外から人々が集まる『ニセコ』。 世界が注目するニセコの今の様子やお仕事について紹介します。
12月	清水 宏保 (元スピードスケーター 選手・タレント)	林 克彦 (十勝サウナ学会理事)	サウナ × 温泉 × ウィンタースポーツ	今また来ているサウナブーム！ サ活が盛んな十勝よりサウナの魅力とともにリアルな暮らしを紹介します。
1月	星 昌宏 (プロキャンパー)		キャンプ × 星空 × ワークेशन	自然豊かな北海道はキャンプ場も星空がきれいな山、川、海とバラエティ豊 富です。都会と田舎が融合する函館でのキャンプとワーケーションの魅力を お伝えします。
2月	全6回のゲストの中からご出演いただきます。 お楽しみに!!		まとめ	全6回の総まとめ！ これからの北海道とのつながり方や、移住についての制度や補助について お教えします。

北海道 総合政策部 地域創生局地域政策課 ☐ hokkaido.iju@pref.hokkaido.lg.jp Tel.011-204-5089

北海道とつながる
カフェの公式アカ
ウントもご確認
ください！



LINE



facebook



Instagram



【公式】移住だべさ！北海道チャンネル
～移住に関する動画を絶賛掲載中～



<https://youtube.com/channel/UC6Qb1iVo9mWmTpfqgq6AG4w>



「創る」バックナンバーは、“ほっかいどう応援団会議ポータルサイト”へ

QRコード読取で
バックナンバーへ

ほっかいどう応援団会議

検索

U R L : <https://hkd-ouendankaigi.jp/info/tukuru.html>